

特集号「言語コミュニケーション教育の研究と開発」 刊行に寄せて

島根大学副学長
島根大学教育学部教授
足立 悦男

教育学部においては、これまでも、学部内の自主的研究グループがありました。特定の研究主題を立てて、研究室の枠を越えてお互いの研究を交流する、という研究会です。私の赴任した頃には、教科教育懇話会という会がありました。お茶を飲みながら、新任の教員の発表や退官される先生のお話を伺う、気さくな会合でした。さまざまな教科の共存する教育学部らしい会合でした。

釜山教育大学校との交流が始まったのは1990年からです。その年に国際科学研究（国際科研）に申請していた「日韓相互理解教育プログラムの開発研究」が採択され、3年間の相互交流がありました。1996年には、再び、「日韓相互理解教育プログラムの開発研究」が採択され、私も参加しました。社会科・国語・美術・幼児教育などの多彩な教員がメンバーになり、日韓の子ども文化の比較研究というテーマでした。釜山教育大学校は、西洋史・東洋哲学・幼児教育・韓国語学・政治学の先生方で、3年間、お互いの異文化や異分野を尊重しながら研究交流を深めました。今でも、お一人お一人のことを、なつかしく思い出します。専門や国を越えた共同研究の面白さを実感しました。

教育学部の福祉社会コースの先生がたの福祉文化研究会もありました。新しいコースを担当するようになった社会福祉学・国文学・中国哲学・東洋史・西洋史・政治学・宗教学・社会学などの専門教員で、研究や研究交流を重ねて、『福祉文化』創刊号（2001）～5号（2006）を刊行してきました。

その後も、「世代間コミュニケーションと教育」という独自の研究プロジェクトができて、学部内で研究会や講演会が開かれ、2009年には『島根大学教育学部紀要』42巻別冊特集号が刊行されました。

そして、今回、教育学部・附属中学校・附属小学校の国語と英語の教員全員からなる研究プロジェクト「言語コミュニケーション教育の研究と開発」の5年間の研究の蓄積が、このような特集号としてまとめられました。教育学部の新しい針路に沿いながら、これまでの学部の伝統を受けつぎ、分野・国境・言語・文化・世代などの壁を超えた共同研究の成果をまたひとつ積み重ねたこととなります。

教育学部は、世間で言うとは異業種の集まりです。すべての教科の教科教育学と教科内容学の多様な専門の教員で構成されています。そのメリットを生かして、学部内での新たな研究交流の生まれることを期待しています。